

『数字のお話』

作：輪島貴史

～0～

あるところに終わりの無い不思議な空間がありました  
そこはまだ世界とは呼べない空間で、何も無いから無いも同然  
無いのにそれが終わりなく続く不思議な空間でした

その空間の真ん中に、終わりが無いから真ん中も無いのに、真ん中に  
『数字』と書かれた箱がありました。

～1～

ある時、パチッと目が覚めたかのように、箱が開きました

箱からは『1』という数字と共に、一人の少年が生まれました  
この時、少年は自分が一人この世界にいる事を理解しました  
一つの世界に、一人の自分、でもそれ一つで完結していたため  
この一つだけでは、自分一人では何も出来ない事を知り、もう一つ何かが欲しいと想いました

～2～

そう思った時に、箱から『2』という数字と共に、一人の少女が現われました  
少年と少女は二人なのだと理解しました  
二人でいれば安らぎ、楽しく、喜びを感じ、二人は愛し合いました  
すると辺りは夜になり、ゆっくりと眠れるようになりました  
朝になると起きて「おはよう」と挨拶をかわし、二人で過ごします  
夜になって眠る時は「おやすみ」と挨拶をかわして一人に戻り、それぞれの夜を過ごします  
朝と夜、「おはよう」と「おやすみ」そんな日々を過ごしていると

～3～

ある日、箱から『3』という数字と共に、一人の少年が現われました  
少年と少女と、もう一人の少年で三人なのだと理解しました

三人でいれば、二人ではできなかった遊びができるようになって、より楽しくなり  
3つあれば囲いができるようになり、三角の家を3つ建てました  
3人で遊ぶ時もあれば、二人で遊ぶ時もあり、一人がいい時もありましたが  
ある日、少年が一人でいると、隣の家から楽しい二人の会話が聞こえてきたので  
少年は寂しく、悲しく、悔しい気持ちになりました  
確かに、自分と少女で二人の時もあったけど、今は何故か寂しく悔しい、割り切れない気持ちになりました  
少年は二人の家に行き、仲間外れを訴えましたが、少年と少年の言い合いになり  
次は少年と少女の言い合いになり、ついには3人のケンカになりました

～ 4 ～

すると箱から『4』という数字と共に、一人の少女が現われました  
少年二人と少女二人で四人なのだと理解しました  
四人になって、囲いが広くなり、四角の家になりました  
四人は少年と少女の二組に分かれれば、3人のようなケンカは起きないと思い  
二人ずつ二組に分かれて暮らす事にしました

それぞれの組が二人の時のように安心して暮らせると思っていましたが  
3という数字を理解していた4人はたまにケンカをする事がありました  
二人だったら二人の違いは気にならなかったのに、三人目が真ん中に入ると、  
良い事と悪い事を区別できてしまうのでした

そんな毎日でも、3つ4つあった方が便利な事も沢山あったため、助け合って生活していき  
四人は少年少女から大人へと成長しました

～ 5 ～

すると箱から『5』という数字が現れた時に  
二組の男女から男の子が生まれました

その男の子はとても活発な少年で、いろんな事を知りたい気持ちを持っていました  
最初は一人だったお父さん、安心を与えてくれたお母さん  
友達ができるとケンカにもなり、四人なら割り切れる事もあったり  
5番目の自分があるとどうなるんだろう、自分には何ができるのだろう  
と、冒険心、挑戦心に溢れ、星のようにキラキラした瞳の少年は旅に出ました

旅先で少年は、お父さんやお母さんと同じような経験や、自分にしかできない事も経験しました。誰かを助けたり、自分が助けてもらったり、という良い経験や誰かに迷惑をかけたり、嫌な事をされるという悪い経験、そこから反省して、あえて何もしなかったり、それでも誰かを助けたりと、いろんな経験をしました。

様々な経験をした少年は大人になり、自分の家へと帰って来た時もう一組の男女から産まれた少女も大人になっており二人は結婚し、かつては六人の少年少女であった男女は家族となりました

～ 6 ～

すると箱から『6』という数字が現れました

この6という数字はとても便利な数字で二人を3組に分けられるし、3人ではケンカになった時も、二組に分かれれば、誰かが一人ぼっちになりやすく、割り切れてしまう事が多いので、我慢ができて、諦めがつき、そこまで大きなケンカにはならないのです  
六人なら今まで以上に解決できる事がある、そして、全員の意見が分かれた時でも四角形でできた六面のサイコロを振って出た目に従えば解決します  
なんて便利な数字でしょうか

しかし、欠点もありました  
便利で、割り切りやすく、解決しやすいため  
同じ事がずっと続くのです  
問題がおきても解決  
もう同じ事の繰り返しですから、誰かが旅に出る事もないのです、冒険する必要が無いのです  
ゆえに、同じ事をずっと繰り返していました

ある日、誰かがふと、あの箱の事を思い出しました  
なぜでしょう、ふいに箱の事を思い出したのです  
まるでキラんと頭の上に星が光るように、閃いたかのように箱の事を思い出したのです  
この閃きの事を直感といったりもしますが、第六感とも呼びます  
第六感が働いたのですね、その感を頼りに箱を見た時

～7～

箱からは『7』という数字が現れた瞬間  
空に7色の虹ができました  
レインボーと呼ばれる虹は、この世界と六人の心を刺激し  
今までにない沢山の事がおきました

ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シと7音階の素敵な音楽が鳴り響くと  
7つの海が広がり、7つの大陸が浮上すれば  
7色があるから服装もカラフルで、月・火・水・木・金・土・日と7日間ある1週間  
みんな楽しく七変化したかと思えば  
欲望も湧き上がり『強欲』から思い上がりの『傲慢』になんでも食べ散らかす『暴食』  
で食欲が満たされたかと思えば、色気たっぷりに物事を色物、色メガメでしか見えない『色欲』から、さ  
らにはねたみ、うらやむ『嫉妬』から止めどない怒りの『憤怒』が巻き起こり、あとには怠け心の『怠惰』  
といった、七つの大罪が心に住み着き  
各地には七不思議が生まれ、もう訳が分かりません

～8～

すると箱からは『8』という数字と共に  
八百万（やおよろず）の神々が生まれ  
世界はさらに広がりを見せると  
人は八面六臂の八方美人と、様々な人格が生まれ、嘘八百を付いたおかげで四苦八苦し  
一か八かの大博打で八方ふさがりと、七つの大罪あたりから悪い事が多くなってませんか？  
それでもあきらめるもんかと、七転び八起きの精神で頑張りましたが  
8という数字は、見ての通り、上と下をずっと回り続ける出口の無い世界  
横に倒すと∞（無限）にもなるので、8は∞で∞は8、縦にしようが横にしようが  
無限にずっと続くのです

最初は1から始まったこの世界も、今ではこの状態で収集がつかません  
1の数字から生まれた、かつては少年であった人間が叫びました  
「誰かこの世界を止めてくれ！」とその一言が8の世界に足された時

～9～

箱からは『9』という数字が現れました  
すると、終わり無く無限に続いたこの世界にも、ひとまず終止符が打たれ、九死に一生を得えました

人間関係のもつれとなった三角関係の始まりの3も、6という数字からすれば割り切れる数字であるように、9にとっても割り切れる数です、が、しかし、やはり、3あたりから悪い事が始まりました  
いやいや、実は2の時点で、表と裏、善と悪、光と影、生と死が生まれていたのです  
3はその起爆剤のようなものかもしれません  
結局3は2では割り切れないのですから

思えば良い事、素敵な事は沢山ありました  
この世界の事柄は良い事も悪い事も半分半分です  
決して悪い事ばかりじゃない、けれども、なぜ悪い言葉ばかりが多くなるのでしょうか  
人の噂は良い事よりも悪い事ばかりが広がります  
このまま数が増えれば、良い事も増えるけど、悪い事も増えてしまう  
もう沢山だと皆が思った時  
世界には9があふれ、箱も大きく膨らみました  
「999999999……」  
横に広がった9の数字はもう限界、そろそろ破裂して次の数字が生まれるかも・・・

その時、かつての少年が「もう終わりにしよう」と哀しくつぶやき  
そっと箱を閉じました。

～繰り返しがり、繰り返し～

すると後ろから声がしました

「あー、間に合わなかったか」と  
振り返るとそこには少年が立っていました  
不思議な服で身を包み、その後ろには光輝く円盤がありました

「もったいない事したなあ」とその少年は言います  
「もう終わりにしたかったから」とかつての少年は返しますが  
「終わったんじゃなくて、終わらなくなったんだよ」とその少年がさらに返します  
「だって終わりにしたかったから」とかつての少年が返すと  
「だから、終わるはずが、そのせいで終わらなくなったんだよ」とその少年がさらにさらに返します  
「でも、もう終わったんだよ」とかつての少年が返すと  
「ゆえに、終わらないんだよ、なぜならば、もう終わったから」とその少年がさらにさらにさらに返します  
す  
「終わったのだから、もういいじゃないか」とかつての少年が返すと

「ああ、これで9回目のやりとりだ・・・話を繰り返すね」と、その少年があきらめて、一旦一息ついたあと、こう言いました

～10～

「確かに君は終われるのかもしれないけど、そのせいでこの世界は終わらなくなったんだよ、ずっと数字は続く、だって9の次が無いのだから、繰り返すしかないだろう、だから終わらない」

～11～

すると少年は

「この終わらないやりとりはいつまで続くの？」と割り切れない想いで聞くと

～12～

『2』の時に現れた少女にそっくりな子が現われ

「仕方ないでしょ、繰り返しがちやっただから。あなたは割り切れないこの世界が辛かったのでしょう、だから終わらせにきたのに、自ら終わらせちゃったのね。これで12回目のやりとり。まあ少しは割り切れるかな、12進法は便利だから」と言い

～13～

続いて『3』の時に現れた少年にそっくりな子がさらに

「でもずっと続いちゃうよ、3も13も割り切れないから。あーあ、君と割り切れるはずだったのになあ、終わらなくなった。これで13回目のやりとり、な？割り切れないだろ？13は不吉な数字なんだぜ」と言った

～14～

そして『4』の時に現れた少女にそっくりな子が現われ

「まあまあ、終わらない話も一旦は落ち着こうよ、半分に分かれて話しましょ」と言った

～15、16、17、18、19、繰り返しがり…～

そして次々と、『5』や『6』の少年少女が現れていき、話は終わらない

『1』の少年の、割り切れる話と割り切れない思いが続いて行く  
その間、虹が現われたり、同じ現象が繰り返されたりしたが  
段々とかつての少年の年齢は進み、どんどん年老いていく  
同じ話を繰り返したり、たまに前の事を忘れてたりしていく

かつての少年は言った

「いつまでこの話は続くんじゃ、わしゃもう99歳じゃ、ん？お前さん、わしの子供の頃に似とるのう」

その『1』にそっくりな少年は言った

「だから僕だよって、君が71歳の時にも、81歳の時にも言っただろう？」

少年は続ける

「そろそろ100歳だ、君が9の次の数字が生まれる瞬間を止めたのを、止められなかったから、止めるのを止められなかったとか、終わったのに終わらないとか、そんな話が續くんだ、9の次の数字を言い表せないように、終わる終わらないの言葉も言い表せないんだ  
だからせめて、僕にできる事は0を贈る事だよ。」

かつての少年は言った

「おかげでもうじき100歳になれるんじゃな、それは理解したよ  
思い出したぞい、わしが9の次の数字が生まれる前に箱を閉じたから、数字が終わらなくなったんじゃろう、だから9の次の数字が有るそっちの世界では、 $\pi$ も $\sqrt{\quad}$ も必要無いのじゃろう  
数字は簡単に終わりにできるのじゃろう、ゆえにそっちでは子供でも簡単に宇宙船が作れるのじゃろう。  
でもそろそろ終わりにしてくれんかね、疲れたわい」

少年は答えた

「うん、分かったよ、次の0で終わりにしよう。でも本当の終わりにはならないからね、一旦は、おやすみ、だけど、また、おはよう、になるから」

かつての『1』の少年は言った

「うーん・・・それでも、それは、そんなに悪い事じゃないと思うんだ」

～0～

少年は静かに眠りにつきました

その寝顔はとても安らかで、また明日の朝が待ち遠しいようでした

